部分的に遮蔽された顔刺激への単純接触効果

○富田瑛智・松下戦具・森川和則

(大阪大学大学院 人間科学研究科)

キーワード：単純接触効果，知覚的補完，顔

Mere Exposure Effect for Partially Occluded Faces

Akitoshi TOMITA, Soyogu MATSUSHITA and Kazunori MORIKAWA

(Graduate School of Human Sciences, Osaka University)

Key Words: mere exposure effect, perceptual completion, face

目 的

単純接触効果は先行して接触した刺激に対する評価がポジティブに変化する現象である。富田・松下・森川 (2012) では単純接触効果は部分的に遮蔽された顔の線画に接触した時、遮蔽されていない (すべて見えている) 顔の線画にも般化する

ことが示されている (図2左)。

それに対して、部分的に遮蔽された無意味図形を用いた場合には顔刺激のような般化が生じないことが分かっている (富田・松下・森川, 2013)。顔の線画 (富田ら, 2012) と無意味図形 (富田ら, 2013) における単純接触効果の生じ方の違いは、単純接触効果が遮蔽された刺激から遮蔽されていない刺激へ般化する際に顔特有の処理が関わる可能性を示す。

しかし、富田ら (2012) の結果が、意味的に顔と認識することができる (顔の部分処理) だけで生じるのか、顔特有の全体処理により生じるのか明らかでない。顔の部分処理により、遮蔽された刺激への単純接触効果が遮蔽されていない刺激に般化するのであれば、倒立顔を用いた場合でも富田ら (2012) と同様に単純接触効果が得られるはずである。それに対して、この単純接触効果の般化が顔特有の処理に基づくのであれば、倒立顔を用いた場合は、顔特有の全体処理 (配置処理) が弱まるため、遮蔽された顔刺激への単純接触効果が遮蔽されていない顔刺激に般化しないと予測される。

実験では、参加者は最初に部分的に遮蔽された倒立顔の線画を繰り返し見た。その後、参加者は同様に遮蔽された倒立顔、遮蔽位置の異なる倒立顔、遮蔽されていない倒立顔に対して好意度の評定を行った。

方 法

実験計画 提示回数 2 水準 (0 回, 12 回) × 評定刺激の種類 3 水準 (同一遮蔽, 遮蔽位置変更, 遮蔽なし) の参加者内 2 要因であった。従属変数は好意度評定値であった。

参加者 実験参加者は大学生及び大学院生 29 名であった。
刺激 刺激は幅 20 pixel のグレーの縦線で周期的に遮蔽した倒立顔の線画 24 枚 (400 pixel × 400 pixel) であった。それぞれの顔刺激に対して、遮蔽あり刺激 (同一遮蔽刺激) (図 1a), 遮蔽位置変更刺激 (図 1b), 遮蔽なし刺激 (図 1c) を作成した。

手続き 接触段階, 評定段階の順に行った。接触段階では、12 枚の遮蔽あり刺激 (図 1a) が 12 回ずつ提示された。提示時間は 500 ms であり (ISI 500 ms), 提示順はランダムであった。評定段階では顔刺激 24 枚が提示された。刺激の内訳は接触段階で提示された 12 枚の顔刺激と接触段階で提示されなかった 12 枚の顔刺激であった。接触段階で提示された 12 枚の顔刺激はそのうち 4 枚が接触段階で提示された刺激と同じ位置が遮蔽されており (同一遮蔽条件), 残りの 4 枚は異なる位置が遮蔽されており (遮蔽位置変更条件), 残りの 4 枚は遮蔽されていない状態で提示された (遮蔽なし条件)。接触段階で提示

されなかった刺激も同様に 4 枚ずつが各条件の刺激に割り当て提示された。刺激の割り当てはすべてランダムであった。すべての刺激は 1000 ms 提示され、参加者はそれぞれの刺激に対して 7 段階の好意度評定を行った。

結 果

好意度評定値について参加者内 2 要因分散分析を行った (図2右)。提示回数に主効果の傾向、提示回数×評定時の刺激に交互作用が見られたため ($F(1, 28) = 3.00, p < .09, F(2, 56) = 3.45, p < .04$), 評定時の刺激毎に提示回数の効果がみられるか下位検定を行った。その結果、好意度評定値は同一遮蔽条件でのみ 0 回提示 ($M = 3.25$) より 12 回提示 ($M = 3.75$) の方が高かった ($p < .01$)。

考 察

倒立顔を用いた場合には、正立顔を用いた富田ら (2012) と異なり同一遮蔽刺激にのみ単純接触効果が生じた。また、本研究の倒立顔への単純接触効果は、無意味図形を用いた場合と同じであった。正立顔の場合のみ遮蔽なし刺激への般化が生じたため、顔刺激を用いた場合の単純接触効果の般化には、顔特有の処理が関わることを示された。

引用文献

- 富田瑛智・松下戦具・森川和則 (2012). アモータル補完された顔刺激への単純接触効果, 日本基礎心理学会第 31 回大会発表論文集, 57.
富田瑛智・松下戦具・森川和則 (2013). 部分遮蔽刺激を用いたアモータル補完時の単純接触効果の検討, 認知心理学研究, 10, 151-163.

図1 評定時に提示された刺激。a: 同一遮蔽 (接触刺激と同じ), b: 遮蔽位置変更, c: 遮蔽なし。

図2 各刺激への好意度評定値。左: 富田ら(2012)の結果 (正立), 右: 本研究の結果 (倒立)。